

研究成果の紹介

1 いもち病防除剤のMBI-D剤代替薬剤の選定

ねらいと成果

いもち病防除体系は、長期持続型薬剤の育苗箱処理が中心となっており、MBI-D剤であるカルプロパミドは、その代表的な殺菌剤の一つである。しかし、2003年に、カルプロパミド箱粒剤の施用ほ場でいもち病の発生が認められ、この時期以降、西日本を中心に、カルプロパミド箱粒剤の耐性菌の発生が確認された。

そこで、カルプロパミド箱粒剤に替わる箱施用剤の検索が急務となり、現在、市販されている長期残効型箱施用剤についてはほ場試験を実施し、その効果・持続性等の特性を明らかにした。

内容

(1) 試験方法

試験は2004年、2006年に農林水産技術総合センター内のほ場で行い、品種は「キヌヒカリ」を用いた。2004年の供試薬剤はプロベナゾール（24%製剤）箱粒剤（商品名：Dr.オリゼ箱粒剤）、プロベナゾール（10%製剤）箱粒剤（同：ビルダープリンス）、ピロキロン粒剤（同：デジタルコラトップ箱粒剤）、チアジニル箱粒剤（同：ブイゲット箱粒剤）を用い、対照としてカルプロパミド（同：ウイン箱粒剤）を

用いた。また、2006年は、プロベナゾール（24%）箱粒剤とオリサストロビン箱粒剤（同：嵐箱粒剤）を供試した。耕種概要は各年とも5月中旬は種、6月上旬～中旬移植で、出穂期は8月中旬であった。試験は耐性菌接種条件下で行い、薬剤は全区とも50g/箱を移植当日に施用した。調査方法は、移植後、経時的にいもち病の発病を調査するとともに、7月下旬に各区100株、3か所について発病程度別に発病株数を調査し、発病度を算出して、薬剤の効果判定を行った。

(2) 試験結果

2004年の試験は中発生条件下の試験で、プロベナゾール（24%）箱粒剤は、葉いもちに対して高い防除効果を示し、7月30日の防除価は97.5と持続性が高かった。また、プロベナゾール（10%）についても防除価81.3と持続性が確認された。ピロキロン粒剤は発病株率58.7%、発病度14.7と、無処理区と比較して効果は認められるもののやや劣った。チアジニル箱粒剤は、プロベナゾール24%製剤に比べ効果はやや劣るもののプロベナゾール10%製剤とほぼ同等の防除価83.7と持続性が確認され、代替薬剤として有望であった（表1）。また、2006年は甚発生条件下であったが、供試したオリサストロビン剤は、葉いもちに対してプロベナゾール（24%）剤の

防除価が78.8であったのに対してオリサストロビン剤は90.9と高い防除効果を示した。（表2）。

表1 各種薬剤の葉いもちに対する防除効果（2004）

	7月20日		7月30日		防除価
	発病株率(%)	発病度	発病株率(%)	発病度	
プロベナゾール (24%)	2.0	0.2	2.7	0.7	97.5
プロベナゾール (10%)	8.0	0.7	21.3	5.3	81.3
ピロキロン粒剤	32.0	5.6	58.7	14.7	48.1
チアジニル箱粒剤	12.0	1.8	18.7	4.6	83.7
カルプロパミド箱粒剤	78.2	12.7	97.3	34.7	0.0
無処理	84.3	12.2	96.0	28.3	-

表2 各種薬剤の葉いもちに対する防除効果（2006）

	7月19日		8月2日		防除価
	発病株率(%)	発病度	発病株率(%)	発病度	
プロベナゾール (24%)	0.5	0.1	80.9	9.8	78.8
オリサストロビン	0.5	0.1	41.3	4.2	90.9
無処理	100.0	22.0	100.0	46.2	-

普及上の留意点

同一系統の薬剤（特に嵐粒剤、オリブライト粒剤、アミスター等のストロビルリン系）の連用は避ける。

岩本 豊（農業技セ・病害虫防除部）
（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）